

ちよつと一服



# 天皇杯に輝く名茶 そのぎ茶

～その歩みをたずねて～

東彼杵町史談会会員 谷山 満三郎

## 1. はじめに

平成22年早春から始まった、NHK大河ドラマ「龍馬伝」は、ゆかりの深い長崎市はもとより、県下に熱気溢れる龍馬ブームが沸き起こった。長崎市出身の龍馬役、福山雅治氏、共演する女優真木よう子氏の見事な演技に日曜の晩はテレビの前に、家族の談笑が絶えることはなかった。

この番組に期待するわが町の多くの人びとは、幕末から明治維新へと動く日本の開国が260余年の鎖国から開放され、日本の政治・経済・文化などすべての制度が改革されて、活気溢れる新時代を迎える期待であった。

幕末に活躍する坂本龍馬と海援隊（註海援隊は商社である）。この機会を待ち望んでいた貿易商たちのうち、茶商大浦慶女の物語はこの書の主役の一人である。（大浦慶女伝ノート、本馬恭子）

大浦慶女は、幕末嘉永6（1852）年、明治維新となる15年前、長崎出身のオランダ人テキストルに嬉野茶を見本として海外に送ることを頼んだ。国産茶を見本として外国に送り出した初めである。その3年後沢山の茶の注文があった。慶女にとっては長い忍耐の末にむかえた朗報である。巨額の注文に嬉野茶だけ（不動山、吉田、彼杵など）では応じきれず、慶女は九州一円の茶の産地を駆廻り、或いは人を遣してやっと1万斤（慶女の見本は1斤250匁）の茶を集めることができた。この時旧彼杵宿紙谷好太郎、千綿宿伊勢屋（土肥）岡田伊兵衛が茶の買集めに奔走したとの記事がある。

こうして苦心のすえ集めた1万斤の茶は、長崎港からスラバヤ（インドネシア首都）を経て、アメリカに輸出されたのである。これがわが国の本格的な製茶貿易の先駆となったのであった。（大浦慶女のことは後に詳しく述べる。）

明治新政府は、わが国の当面する輸出品として生糸・茶などを定め、この生産に力を入れたのであった。その後140年を超えた社会では、関係者の尽力によって茶の生産は拡大し続け、消費も更に増加しているが、この傾向はまだまだ続くものと予測されている。この時平成22年11月23日、東京代々木の明治神宮会館で行われた蚕糸・地域特産部門で、東彼杵町の茶生産農家 松尾政敏さん夫妻が、栄えある天皇杯を受賞されたのであります。

天皇杯は農林水産関係の表彰制度の最高位に位置づけられ、農産・園芸等の7部門の農林水産大臣賞受賞者517点の中から選ばれたもので、表彰式では松尾さんが受賞者を代表して「消費者の皆様は、それぞれの地域や風土で育てた心のこもった安全で安心できる農産物を、安定的に提供できることを責務として、今後も農林水産物の生産に誇りをもち、さらなる技術の向上と、経営の改善に努めて参りたい」と感謝の言葉を述べられました。

【参考文献 県央農林部だより他】



赤木地区の茶畑

## 2. 名茶のふるさとを探して

長かった秋雨がすっかり上り、盛夏とかわらぬ日照の中を、国道34号線 平似田登口から町道平似田・中岳線を上る途中、九州横断自動車道のガードをくぐる。さらに400m上ると近年開通したばかりの立派な農道に連がる、広域農道大村東彼線である。

広域農道大村東彼線は計画によると 全長=12km、幅員=8m(余巾2mを含む)、着工 平成12年度 完工予定、平成24年度 現在開通した延長 約6.2km。

千綿地区の農林道整備については戦前より村政の最重点施策として、歴代村長に引継がれたが、大戦後に川瀬村長、溝上喜世人村長が、「千綿中央道路を造らねば、千綿の発展はない」と常日頃痛切に話しておられた。住民も又道路の必要性を痛感していたが、数十年に亘る悲願がついに実現したのである。大村市荒瀬から東彼杵町法音寺に到る広域農道大村東彼線の周辺こそ、名茶そのぎ茶のふるさとではなかろうか。

学説によると、主峰多良岳は約6千万年前から活動し、多良岳東南麓の熔岩台地を形成したと考えられていて、野岳台地・千綿台地・赤木台地と連がり、彼杵川・中尾川に溪谷となって落込んでいる。

広域農道大村東彼線の沿線木場郷・野田に古刹寿量山、本地寺が鎮座する。(郷土誌「水と緑と道」)によると、江戸幕府の時代 寛永18(1641)年、若狭国(福井県)長源寺日審上人が、日蓮宗布教のため江串村を訪れたとき、木場郷の児玉久左衛門は日審上人に深く帰依し、慶安2(1649)年出家して、法名を宗喜日悦と改めた。刀脇差を売って釈迦如来像を調べ、木場庚申原に庵室を建て信仰の道を歩いた。これが本地寺の起源である。

此頃、大村本経寺の五世日通は、かねて江串村にも寺の建立を念願していたので、寛文9(1669)年京都本国寺に上山の折、日運僧上にその旨を申し上げ即刻許可を載き、併せて「寿量山、本地寺」の山号寺号をも賜った。日通は自分の師である日選を開祖として、二世日通、三世宗喜日悦とした。天和元(1681)年、四世日心の代に庚申原の堂を、大村藩からの援助に頼らず、信徒の浄財によって、野田山の現在の寺地に移築した。なほ庚申原の跡地には、昭和10年、尾崎孫三・尾崎勝吉・井手寿峰・中尾守助・岸川市蔵・森林孫市の明治6年生れの人達によって宝塔が建立されている。前住職 井手寿謙師、当山三十七世が考古学者として活躍された地帯である。

大村史話上巻は井手寿謙師の古代史を辿る困難な活動を詳しく述べてある。

昭和30(1954)年の初め頃までは、この大村の地に先土器時代の遺跡があると信じていた者はいなかった。何しろ1万3千年も1万4千年も、もっと古い時代のことだから、果たして大村に群馬県の岩宿(納豆売りの青年 相沢忠洋さんが、昭和24年に発見し、わが国の考古学の定説をくつがえしてしまうほどの大事件に発展した日本一貴重な遺跡)のような遺跡があるとは、1人の篤学の僧侶(井手寿謙師)を除いては、誰も知るものはなかったのである。

ところが昭和34年の夏、東北大学(仙台)の考古学の助教授(現在教授)芦沢長介先生が見えて、井手先生を訪ねられ、驚くような発見を告げられたものであった。

【資料：水と緑と道(上)、大村史話(上)】



篤学の僧侶  
井手寿謙先生